

# 大学生の孤独感に関する研究

—携帯電話の使用が孤独感及び自己意識傾向に与える影響—

0707032

萬歳 愛美

## 【目的】

私たちは日常、非常に多くの感情を体験する。そのうち「孤独感」は青年期の中で感じやすい感情(落合,1987)であり、その孤独感が青年期の社会生活に及ぼす影響は深刻なものである。この孤独感の規定因として先行の諸研究で自己意識傾向(公的および私的自己意識, 社会不安, 自尊感情)(諸井,1987), 電話機能(諸井,1992), 携帯メール機能(五十嵐・吉田,2003)が挙げられている。よって、本研究では孤独感の低減に影響を与える規定因について検討を行い、孤独感の変化を明らかにすることを主目的とする。まず、一つ目の目的として携帯電話の普及が進んでいなかった約 20 年前の大学生の孤独感得点(諸井,1987)と、現代の大学生の孤独感得点を比較し、「孤独感得点は携帯電話の普及によって低減する」という仮説について検討する。そして、孤独感の規定因となっている「自己意識傾向」について諸井(1987)と比較を行うことを二つ目の目的とする。また、孤独感に最も影響を及ぼす規定因は自己意識傾向、携帯電話のどちらかを明らかにすることを三つ目の目的とする。

## 【方法】

2010 年 10 月下旬から 11 月上旬に某私立大学の学生を対象に質問紙調査を実施し、213 名(男性 48 名, 女性 165 名, 平均 20.33 歳)を分析の対象とした。

質問紙は、フェイスシートの他に改訂版 UCLA 孤独感尺度邦訳版(工藤・西川,1983), 自己意識尺度(辻,1993;押尾・渡辺・石川,1986), 自尊感情尺度(山本・松井・山成,1982), 居住形態, 携帯電話の所有状況, 所有期間, 所有理由, 電話機能(着信・発信)使用回数および人数, メール機能(送信・受信)使用回数および人数から構成されるものであった。なお, UCLA 孤独感尺度邦訳版については実際の孤独度を調査するため、「私は孤独である」という項目を項目 21 として追加した。

## 【結果と考察】

### 1. 孤独感得点の比較

UCLA 孤独感尺度邦訳版の全 20 項目による孤独感得点を算出したところ, 全体では 37.49 であった。男女別にみると男子は 37.42, 女子は 37.51 であった。これらと先行研究である約 20 年前の諸井(1987)のデータとを比較すると, 全体の孤独感得点と男子の孤独感得点には約 1~2 点の差がみられた。しかし, 女子の孤独感得点にはほとんど差がなかった。よって, 仮説 1 は支持されたが大幅な減少は無かったため, 本研究の結果からは「携帯電話が孤独感に大きな影響を及ぼすわけではない」という結論が導き出された。

### 2. 孤独感と自己意識傾向の関係

UCLA 孤独感尺度に対し因子分析(最尤法—プロマックス回転)を行った結果, 3 因子が抽出され「情動的孤独感」「社会的孤独感」「自己的孤独感」とした。自己意識尺度に対しても同様に因子分析(最尤法—プロマックス回転)を行った結果, 4 因子が抽出され「社会不安」「公的自己意識」「自己の内的状態の意識(=私的自己意識)」「自己省察(=私的自己意識)」とした。相関分析と重回帰分析の結果, すべての孤独感因子と社会不安・公的自己意識・自己の内的状態の意識・自尊感情得点が孤独感の有意な規定因であった。よって, 孤独感の規定因は約 20 年前と変化していないことが明らかとなった。

### 3. 孤独感・自己意識傾向・携帯電話機能の関係

重回帰分析の結果, 社会不安・公的自己意識・自己の内的状態の意識・自尊感情得点・自己省察・電話利用度・メール利用度のすべてが孤独感の有意な規定因であった。そして標準化係数に注目すると, 最も孤独感に影響を与えているのは自尊感情得点であるという結果になった。今後の展望としては携帯電話機能について詳しい調査を行うこと, 孤独感と自尊感情との関連性についての検討をすることが挙げられる。

(指導教員 豊村 和真教授)